青年期における人生に対する積極的態度に関する研究

―KJ 法による検討と尺度の構成を中心として―

臨床心理学コース　　海老根　理　絵

The research of the positive attitude toward life in adolescence

Rie EBINE

The purpose of this study is to assess qualitatively the structure of the positive attitude toward life in adolescence and to develop, based on the results, a scale that measures the positive attitude toward life. In Study 1, I conducted the open-ended format survey of 54 university students on the attitude toward life and classify the obtained data with the KJ method. As a result, it was made clear by the findings of previous works that the psychological structure model obtained in Study 1 was valid as a structure model on the positive psychology characteristic in adolescence.

In Study 2, based on the results of Study 1, I made a 46-item scale on the positive attitude toward life, and applied it to 252 adolescents. The factor analysis with the promax rotation indicated 5 subscales, 25 items. The alpha coefficient ranged from .76 to .91, and the retest reliability after a two-week interval ranged from .82 to .94. Its construct validity was confirmed in the relationship with the fulfillment scale (Ohno, 1984) and SWLS (Kakuno, 1994).

目　　次

第１章　問題と目的
第２章　研究１
　Ａ節　目的
　Ｂ節　方法
　Ｃ節　結果と考察
第３章　研究２
　Ａ節　目的
　Ｂ節　方法
　Ｃ節　結果と考察
第４章　総合考察

第１章　問題と目的

今日，価値観が多様化し，青年にとって人生における様々な進路選択が可能となったと言える。しかしその一方で，1990年代後半以降，社会的に取り上げられてきた“ニート”など，就業意欲のない若者の数は，いまだ減少している気配はない。更に，就労意欲があるにも関わらずその機会を与えられない者，また，就労できたとしても，ギリギリの生活を維持することさえ困難な，いわゆる“ワーキングプア”層も増加し，将来への希望を持てず，無気力に陥っていく若者は今後益々増えていくと予想される。

つまり現代は，青年にとって，自分の人生に対し積極的な態度を持つということが決して容易ではない時代と言えよう。

青年期における無気力に関する研究は，これまでErikson（1959／1982）のアイデンティティ概念やLewin（1951／1954）の時間的展望との関連から数多く行われ，青年期の心理について多くの知見をもたらしてきた。しかしその一方で，青年期の心理に関する多くの研究は，否定的な心理面に焦点を当て，肯定的な心理面についてはほとんど当ててこなかったという事実もある。

ここ20年あまり，心理学の分野において“ポジティブ心理学”という，人間における肯定的な側面に関する研究と実践の運動も起こりつつある（島井，2000）。「本来，心理学が目指してきたものは，障害や弱さだけを研究することではなく，人間の優れた機能について研究することにもあったはずである」[1)]（Seligman, 1998）という意見もあり，困難な状況にありながらも，

人間が持つ，適応的，健康的といった，肯定的な心理の構造について研究することも，今後の研究における課題であると言えよう。

青年期は，人生における様々な決断を迫られ，自己について見つめ直す時期にあたり，更に前述したように，現代は人生への選択肢が増えるという一方で，就労や経済状況において明るい未来を抱くことが困難な時代となっている。しかしながらこのような状況下においても無気力な状況に陥らず，自己の人生に対して積極的な態度を持つ者もいるという事実を忘れてはならないだろう。

先行研究において，その割合は少ないものの，青年期における心理の肯定的側面に焦点を当てた研究として以下のようなものがある。寺崎・網島・西村（1999）は，大学生の主観的幸福感の構成要素を検討し，主観的幸福感とは，「過去，現在，未来にわたる人生に対して肯定的な評価を持ち，活動的快感情が高く，倦怠感情が低いことである」[2)]と結論づけた。また，水野・西本・井上（2006）は，青年期におけるポジティブイリュージョンと心身症状，自己肯定感について検討し，その結果，ポジティブイリュージョンが強い者ほど自己肯定感も強くなるとしており，日潟・齊藤（2007）は，青年期にある者が心理的に安定した状態で時間的展望を抱く要因として，自己の過去，現在，未来におけるライフイベントに対する関与の強さと的確な認知をしていることを挙げている。

このように，先行研究では，青年期における自己に対する心理と共に，人生に対する心理が，彼らの精神的健康や，主観的幸福感における，構成要素，または影響要因として主要なものとして挙げられている。

無気力やアパシー，更に自殺等，現代の青年期における人生に対する消極的，回避的傾向についての予防，援助，教育を考えたとき，その対極として考えられる人生に対する積極的な態度について，その構造を知り，その他の要因との関連を探ることは重要であり，青年期における精神的健康や主観的幸福感について検討する上での新たな切り口となると考えられる。

このような背景から本研究１では，青年期にある若者にとって，「人生に対する積極的態度とはどのようなものなのか」を検討し，その心理構造を明らかにすることを目的とした。

また，これまで，人生に対する評価や満足度について検討するため作成された尺度には，植田，吉森，有倉（1992）の幸福感尺度，Newgarten, BL., Havighrst, RJ., & Tobin, S.（1961）の“Life Satisfaction Index-A”を修正した和田（1990）の“日本語版 LSI”，Diener. E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S.（1985）の“The Satisfaction With Life Scale（以下，SWLS）”の日本語版である，角野（1994）の“人生に対する満足尺度（以下，日本語版 SWLS）”などがあるが，これらの尺度は，過去，または現在における人生への評価に重きを置いているという特徴がある。青年期の人生に対する心理を扱う上では，現在から未来へという方向性を持った尺度が必要となると考えられる。

さらに青年期の心理に特化した心理尺度も多くあるが（大野，1984；宮下，1987；谷，2001），これらの尺度の多くは Erikson（1959／1982）のアイデンティティ概念から青年期の心理を捉えることを目的として作られたものである。「近年，我が国では，Erikson の示すような危機としての青年期といった構造は失われており，現代の青年の発達的な構造は必ずしもアイデンティティ論に一致するものではない」[3)]（下山，1993）という意見もあることから現代の青年における心理を捉える上では，敢えてアイデンティティ論に拘らず，彼らの人生に対する積極的態度を探り，その結果を純粋に反映した尺度を開発する必要性があると考えられる。

こうした背景から，本研究２では，現代の青年の人生に対する積極的態度を測定可能な尺度を新たに作成することを目的とする。

第２章　研究１

Ａ節　目的

研究１では，青年期における人生に対する積極的な態度の構造を探るべく，自由記述式質問紙により収集したデータに対し KJ 法を用い分類し，心理構造のモデル化を試みることを目的とする。

Ｂ節　方法

調査協力者と手続き　都内大学生54名（男性23名：M＝19.48，SD＝.79，女性31名：M＝19.45，SD＝.62）を対象に，人生に関する意識調査として「自分の人生を積極的に生きるとはどういうことか」について自由記述式質問紙調査を行った。調査時期は2008年５月である。

分析方法　質問の回答の内容を箇条書きでまとめ，157枚のカードを作成した。これを基に，KJ 法を参考に，臨床心理学を専攻する大学院生３名により分類，整理を行った。まず３名の研究者により，合議しなが

ら，全てのカードについて，親近感を覚えるもの同士を集め，42の小グループを編成し，これらについて，１名の研究者が各小グループに見出しをつけ，内容から見て独立すべきものや新たに必要と思われるものを付け加え，46枚のカードを作成した。最後に研究者３名によって見出しカードを基に，さらに大きなグループ編成をし，図解を試みた。

Ｃ節　結果と考察

上記の分析の結果，得られた図解を Figure 1 に示した。以下では，この青年期における人生に対する積極的態度の心理構造モデルについての妥当性を検討するため，“時間的展望”，及び，“他世代における人生に対する心理との比較”という視点から考察を試みる。

第１項　時間的展望からの考察　Lewin（1951／1954）は，時間的展望を「ある一定の時点における個人の心理的過去および，未来についての見解の総体」[4]であると定義づけた。人生における積極的態度と，この時間的展望とは異なった心理概念であると考えられる。しかしながら，自己や人生に対する評価は現在の状況のみではなく，過去や未来を意識し，見渡すことで変化する。そのため，時間的展望に関する研究は，これまで，青年期を中心とし，様々な世代を対象に自己や，人生に対する評価との関係から行われてきた。このことからも，個人における過去，現在，未来を含んだ人生というものに対する心理構造を探る上で，時間的展望との関係は無視できない。

また，研究１から得られた人生に対する積極的態度の心理構造モデルを概観すると，その構成要素には，少なくとも“現在”，“未来”という時間軸に関連するキーワードが存在することが明らかとなった。このような理由から，以下では，人生に対する積極的態度に関する心理構造モデルについて時間的展望研究からの考察を試みることとした。

まず，Lewin（1951／1954）によれば，児童期から青年期における時間的展望の発達として，時間的展望の拡大とともに，自分が願望するだけの実現不可能な水準と，実際に努力すれば実現可能な期待の水準とが分化するという。また，白井（1997）は，小学生から高校生までの横断的調査において，将来への希望が発達と共に一貫して減少しているとし，この減少の背後には，将来をより現実的に捉えるという現実性の発達があるとしている。

このような理論，研究結果は，青年期が，あるがままの自分，現実としての自己を受け入れ，これまで生きてきた経験を経て，実現がある程度制限されうるだろう今後の人生を受け入れること，そして，そこに生き続けることを受け入れること，つまり“人生に対する受容的な態度”を獲得していく時期であることを示しているといえる。そしてこのことは，青年期にある若者にとって，人生に対して積極的な態度を持つとい

Figure 1　人生に対する積極的態度心理構造モデル

うことが，単に人生に対し，能動的な態度を持つだけでなく，現実に対して直面し，自己や人生に対してありのままを受け入れるという受容的な側面も併せて持つことであるということを示しており，それが研究１で得られた心理構造モデルにも反映されていると言えよう。

また，勝俣（1995）は，時間的展望を自動制御理論，心理サイバネティックスにより再構築することを試みた。この研究において，“適応的な時間的展望モデル”を二重制御機構で次のように説明している。まず第１に，時間の流れの中で，過去展望，現在展望，及び未来展望が適度に区分されながらも統合されていること（一貫性），第２に過去展望において，ポジティブフィードバック（ネガティブな経験や状態からも何かを学び取り，ポジティブに認知すること）がなされ，現在展望を媒介にして未来に対する，ポジティブフィードフォワード（目標設定，期待，希望などのポジティブな未来予測）がなされるとともに，常にその連鎖が継続されていることであるとしている。勝俣（1995）により説明された，“適応的な時間的展望モデル”は，その構成要素において，本研究１で得られた，心理構造モデルに通じるところがあり，青年期における人生に対する積極的態度は，時間的展望という視点から見ても，青年期における精神的健康，主観的幸福感と強く関連する心理であると考えられた。

更に，谷（1998）は青年期における基本的信頼感と時間的展望に関する研究において，基本的信頼感は，自己に関する信頼を中心とした“基本的信頼感”と他者に対する信頼感を表す“対人的信頼感”の二つに区別できるとしている。そして，“基本的信頼感”が同一性の感覚における時間的連続性という中核部分の形成と密接に関わっており，“基本的信頼感”が十分に得られていない場合には，自分自身の過去を受け入れることができず，現在における充実感を感じることもできず，自己の時間的連続性に基づいた同一性の感覚が得られないこと，また，自己の時間的連続性も得られないとしている。そしてその一方で，“対人的信頼感”は“基本的信頼感”と比べ，時間的展望との関わりが低かったという。

人の精神的健康や，主観的幸福感を考える上で，他者との関係性は無視しえないものである。にもかかわらず，今回，本研究１で行った，人生に対する積極的態度における自由記述式質問紙調査では，他者との関係における記述は，「周囲の者が自分にしてくれたこと全てに感謝している」という反応以外は得られなかった。時間的展望と関連があると考えられる人生に対する積極的態度においても，“自己受容”という形で自己に対する信頼感，受容感は重要な構成要素である。しかし「他者に対して援助が期待できること」，「頼りにできる人がいるということ」などといった“対人的信頼感”をはじめとした他者との関係性は，人生に対する積極的態度において直接関係していないことが推察され，それが本研究の結果にも反映されていると考えられる。

このように時間的展望研究から，人生に対する積極的態度の心理構造モデルの考察を試みた結果，人生に対する積極的態度は，青年期における精神的健康，主観的幸福感と強く関連する時間的展望という心理構成概念と，多くの共通する部分を持っていることがわかり，研究１で得られたモデルが，青年期における肯定的心理を示す心理構造モデルとして，構成概念的に妥当であるということが示唆されたと言えよう。

第２項　他世代における人生に対する心理との比較

研究１において得られた，人生に対する積極的態度についての心理構造モデルは，青年期という特有の世代において特徴的なものであるか，それとも他の世代においても共通した心理構造なのだろうか。

以下では先行研究の知見から，研究１で得られた心理構造モデルについて，他世代の，特に精神的健康，主観的幸福感の高い者を中心とした人生に対する心理との共通点，相違点を検討し，青年期における人生に対する積極的態度の特徴をまとめることとする。

はじめに，中学生を中心とした，思春期との比較である。中学校進学前後を対象とした都筑（2001）の研究では，中学２，３年生は，将来目標を持ちたいと渇望しながらも，将来への希望が弱く，同時に空虚感を持つという特徴があるとし，それらは，彼らの勉強の理解度や，彼らの進路選択希望と密接に関連していると考察している。また，北爪，小川，菅野（2007）は中学生を対象に学校適応との関連で時間的展望について研究を行った。その結果，学校生活に満足している者は人生への不安が低く，未来よりも充実した現在に目を向けるという傾向があったとしている。これらの研究結果から，思春期における人生に対する心理は，現在が重視され，未来はあまり重要視されていないようである。

それに対し，青年期における人生に対する積極的態度においては“現在重視”と共に，“未来志向”も重要な構成要素であると考えられる。前述したように白井（1997）の研究では，小学生から高校生までの間，

将来への希望が発達と共に一貫して減少しているとし，この背後に将来をより現実的に捉えるという現実性の発達があると考察している。このことから，思春期比べ，青年期は自我同一性の確立が進み，将来設計をし始める時期であることから，“未来志向”が重要な構成要素となってくると推察される。

次に成人期，中年期との比較である。西田（2000）は成人女性の well-being に関して検討し，30代後半から40代前半では，“人格的成長”，“人生における目的”は低くなり，“自律性”においては高くなるという発達変化が見られたとしている。このような結果を西田（2000）は，成人期中期には，自己確立観や安定感が増大するという肯定的変化が存在する（岡本，1994）という理由からではないかと考察している。また，30代後半から40代前半は子育て期まっただ中にあり，自己の“人格的成長”よりも，子どもの成長に目が向くという傾向があることもこの変化の理由として推察される。

それに対し，青年期においては，前述したように，積極的態度においても他者との関係についての要素はほとんど得られなかった。つまり，青年期は他者以上に自己に対する投入が発揮される時期であり，中年期に比べ，彼らの人生において，“人生における目的”に対応するような“目的・夢を持とうとする態度”や，“人格的成長”に対応する“自己や生活の向上を目指す態度”は必要不可欠であると考えられる。

さらに，中年期の人生，生活に対する態度について研究を行った五十嵐・氏家・青田（2000）は，「中年期の多くの人々は今を大切に思っており，やる気次第でまだまだ十分やれそうであると思っている」[5]としている。40代から50代を対象とした中年期は，青年期における積極的態度との共通点として，人生において，“現在重視”であり，“肯定的な態度”を持っているということがいえる。しかし，その一方で，40代から50代前半には「今を大切にする」傾向があり，幸福感も高いが，将来についてはやや無関心という結果が見られたという。このことから五十嵐ほか（2000）は彼らが働き盛りであり，子どもが思春期，青年期である親子の問題など，中年期の親として今現在の問題に目を向けざるを得ず，将来へ目を向ける余裕がないからではないかと考察している。つまり，青年期で重要と思われる“未来志向”は不在となりがちなのであろう。

更に，40代，50代，60代のサークルテストについて検討した日潟・岡本（2008）の研究では，40代では，未来を最も大きく描く割合が高く，50代では，現在，未来，過去へと分散するという結果が得られたという。日潟・岡本（2008）は，半構造化面接調査における質的分析から，40代は未来への志向性が高いが，その未来の目標は，身体的な衰えや自己の有限性に気付くことにより，従来の目標から自分が納得できる形の目標へと変化させられていると考察している。また，50代において，過去や現在に対する志向の分散が見られるのは，白井（1991）の言うところの“ポジティブな現在指向”であり，過去の受容と現在の充実が精神的健康に影響を与えていると考察している（日潟・岡本，2008）。

青年期における人生に対する積極的態度の構成要素である，“未来志向”には，“目的・夢を持とうとする態度”，“自己や生活の向上を目指す態度”が分類されている。青年期の人生への積極的態度には，こうした“未来志向”にこれまでの人生や自己受容が併存しているものの，この“未来志向”には，「理想の自分に近づこうとする」，「日々挑戦している」などといった反応語も含まれていたことから，彼らが40代に見られるように目標や夢自体を，自分に合わせて変化させているとは考えにくいだろう。また，50代では，身体的心理的変化から自分を知る事への意識が高まり，過去の体験が現在の自己を形成する上で必然であり，現在の出来事についても未来の充実に繋がるという語りが得られている（日潟・岡本，2008）ことからも，50代で見られる“現在指向”は「好きなことをとことんする」，「色々なことを楽しむ」といった青年期における“刹那的な態度”を含む“現在重視”とは異なっていると思われる。

次に老年期における人生に対する心理との比較である。前述した日潟・岡本（2008）の研究では，サークルテストの結果，60歳代について，“現在指向”の高まりを指摘し，40歳代，50歳代との比較では，目標を志向する意識は低く，過去を想起することにおいても低かったとしている。その考察として，目標志向が低いのは，60歳代では物理的な未来の時間が狭まるため，未来を資源として使う意識が弱まるためであるとしている。また半構造面接の分析結果を含めた総合考察において，彼らの心理的安定と関連する時間的態度として，過去に区切りをつけ，現在に過去の人生に対する経験の蓄積観や到達感を抱きながら，自分らしさを表現する場としてのポジティブな未来への意識を挙げている。また，山口（2000）は，高齢者（65歳から89歳）を対象に，ライフヒストリー法による面接を行

い，面接記録から，参加協力者を４つの類型に分類した。その中で現在の評価が肯定的である“積極肯定型”と“事実報告型”は現在において適応的な類型とした。“積極肯定型”とは，過去，現在，未来を肯定的に評価し，過去と現在や未来の関連付けを行うという特徴を持ち，“事実報告型”とは過去，現在，未来の関連付けは少なく，現在の評価が肯定的であるという特徴を持つとしている。

これらの先行研究の結果から，老年期における精神的健康の高さには，意外にも，思春期においてと同様，“現在重視”が重要であることが示唆されており，青年期における人生への積極的態度において重要であると考えられる“未来志向”，老年期において重要とされる過去受容はあまり重視されてはいなかった。しかし，もちろん，思春期において“未来志向”以上に“現在重視”が重要であることと老年期において“現在重視”が重要であることとの理由は異なっていると思われる。

思春期においては，前述したように，現実への直面による将来や未来の位置づけの困難さが関連しており，老年期においては日潟・岡本（2008）らが考察しているように，物理的に未来の時間が狭まっていることが起因していると考えられる。更にこれまで，老年期の発達課題は人生の統合であり，それには，過去受容は大きな位置を示していた。しかし今回参考にした先行研究においては彼らの人生において“過去”は区切りとして扱われ，大きな位置を示してはいないようである。

これは，参考にした先行研究がその対象を60歳代中心にしていたことも影響していると考えられる。平均寿命がのびた今日では，身体的，社会的にもエネルギーがまだまだ高い現代の60歳代を，純粋な意味での老年期と位置づけるには無理があると言えるかもしれない。

第３項　研究１まとめ　このように，青年期における人生に対する積極的態度の心理構造モデルを他の世代の人生に対する心理構造と比較した場合，青年期における人生に対する積極的態度の特徴として以下の３つのことが言える。まず第１に，今を生き，“刹那的な態度”を含んだ，“現在重視”な態度を持つ一方で，自己成長や目的達成を含む“未来志向”的な態度を持つということ。第２に他者を対象とするのではなく，自己についての成長や理想に向かう“未来志向”な態度を持つということ。第３に現在の自己，これまでの人生を含んだ“人生に対する受容的態度”を持ちながらも，その重きは，自己の発展性，現在の充実，未来に向けての成長といった“人生対する能動的態度”に特徴づけられるということである。

これらの点から，他の世代の人生に対する心理との弁別性が示唆されたと考えられ，この人生に対する積極的態度の心理構造モデルが青年期において特徴的であるということが構成概念的に妥当であると示唆されたと言えよう。

第３章　研究２

Ａ節　目的

研究２では，研究１の分析において分類されたカテゴリ，反応語を参考にし，青年期における人生に対する積極的態度を測定することが可能な尺度の構成を行うことを目的とする。信頼性については，内的整合性，時間的安定性を検討し，妥当性に関しては，構成概念妥当性を検討することとした。妥当性については，まず第１に，大野（1984）の“充実感尺度”との関連を検討した。その理由は，“充実感尺度”が青年期における自己の存在の肯定，信頼感，また生活に対する充実感や満足度を内容としており，この尺度との正の相関がある程度高ければ，人生に対する肯定的心理を測定する尺度としての構成概念妥当性が示唆されると考えられるためである。

第２に，Diener. et al（1985）の“SWLS”の“日本語版 SWLS”（角野，1994）との関連を検討した。本尺度は主に現在から未来に向けての人生における肯定的な心理を測定している尺度として作成されたものである。それに対し，“日本語版 SWLS”（角野，1994）の内容は過去から現在の人生に対しての満足度，受容度に重きを置いていることから，本尺度と，“日本語版 SWLS”（角野，1994）とは相関を持ちながらも弁別性を持っている必要があると考えられるからである。

Ｂ節　方法

尺度の作成過程　研究１において人生に対する積極的態度の構成要素として分類された10のカテゴリ（Figure１）と，それに属する反応語を参考に，人生に対する積極的態度を測定する為の質問項目を作成した。作成にあたっては，臨床心理学を専攻する大学院生５名により検討し，最終的に内容的妥当性があると同意が得られたもの46項目を採択した。この人生に関する積極的態度を問う項目を使用し，2008年５月に都

内大学生，専門学生264名（男性127名：M＝23.03，SD＝4.68，女性125名：M＝22.55，SD＝5.20，無効12名）を対象に，５段階評定で実施した。

妥当性・信頼性の検討　“人生に対する積極的態度尺度”の信頼性と妥当性の検討を行う為に質問紙調査を実施した。第１標本は都内大学生，専門学生108名（男性57名：M＝23.12，SD＝5.06，女性47名：M＝21.77，SD＝5.58無効４名）であり，第２標本は第１標本の一部，95名（男性50名：M＝23.00，SD＝5.24，女性40名：M＝21.92，SD＝5.76，無効５名）である。調査時期は2008年６月であった。

調査協力者に対し，“人生に対する積極的態度尺度”（25項目，５段階評定），併用尺度として，大野（1984）の“充実感尺度”，及び Diener et al.（1985）の“SWLS”の“日本語版 SWLS”（角野，1994）を集団実施した。尺度の安定性を検討するため，第１標本の一部である，第２標本を対象に２週間後に再度調査を実施した。

いずれの調査でも，調査協力者に対する倫理的配慮から，質問紙表紙，および口頭にて，回答結果は研究以外には用いないこと，回答から個人が特定されたり，回答が外部に漏れたりすることがないこと，回答が拒否できる旨を明示した。

Ｃ節　結果と考察

第１項　探索的因子分析　各項目の基本統計量，得点分布を検討し，整理したデータ項目について，SPSS 11.0 J for Windows を用い，探索的因子分析（主因子法）を行った（Table１）。その結果，固有値は，9.46，2.19，1.90，1.45，1.33，1.06と変化していた。因子間の落差では，第１因子と第２因子の差，第３因子と第４因子の差，第４因子と第５因子の順に大きく，回転前の累積寄与率では，第１因子までは34.94％，第３因子までは47.47％，第５因子までが54.81％であった。

これらの結果から，因子数は５因子が妥当であると判断した。さらに，因子数を５に設定し，プロマックス回転を行った。その結果，.35に満たなかった項目35を除外し，残された25項目について，再度，プロマックス回転を行い，結果，Table１に示した，５因子，25項目を採択した。

第２項　確認的因子分析　研究２において採択した下位尺度の構成モデルの適否を確認する為，Amos５により確認的因子分析を行った結果，CFI＝.920，RMSEA＝.074という結果が得られた。CFI においては.90以上であれば適合度が良いとされ，RMSEA においては.05以下であれば適合度が高く，.1以上はあてはまりが悪い（狩野・三浦，1997）とされていることから，この下位尺度の構成モデルを使用することにおいて問題はないと考えられる。

第３項　下位尺度の構成　分析の結果，設定した５つの下位尺度の内容は次のようになった。

第１因子は高得点であるほど人生において目標や夢を持とうとし，それに向かって生きようとする態度を持つと考えられることから“目標・夢を持とうとする態度”尺度（以下，“目標・夢”尺度）とした。

第２因子は高得点であるほど，日々挑戦し，自分を向上させ，成長しようという態度を持つと考えられることから“自己を向上させようとする態度”尺度（以下，“向上心”尺度）とした。

第３因子は高得点であるほど，人生に対し，肯定的な捉え方をし，人生を前向きに楽しもうとする態度を持つと考えられることから“肯定的に捉えようとする態度”尺度（以下，“肯定的”尺度）とした。

第４因子は高得点であるほど，時間を大切にし，意味のある時間を使おうとする態度を持つと考えられることから“時間を大切にしようとする態度”尺度（以下，“時間重視”尺度）とした。

第５因子は高得点であるほど，自分らしさ，オリジナリティを重視し，自分独自の生き方をしようとする態度を持つと考えられることから“自分らしさを重視する態度”尺度（以下，“自分らしさ”尺度）とした。

因子間相関は全体的に高めであるものの，各因子の項目内容，及び，研究１の結果を総合的に考慮し，各因子は独立した態度を反映していると判断した。

第４項　信頼性　信頼性の推定値，α係数については.76から.95であった。第５因子に関しては，.76と高い数値とは言えないが，項目数が３と少ないことも影響していると言える。さらに再検査信頼性においては，.82から.94という数値が得られたことから，“人生に対する積極的態度尺度”は，内的整合性，時間的安定性において満足できるものであり，信頼性の点において一定の水準に達しているといえる。（Table２）

第５項　妥当性　まず，構成概念妥当性の観点から，大野（1984）の“充実感尺度”の下位尺度と“人生に対する積極的態度尺度”の下位尺度の間における Pearson の積率相関係数を求めた。その結果，Table３に示したように，本尺度のほとんどの下位尺度と“充実感気分－退屈・空虚感”尺度，及び“信頼・時間的展望－不信・時間的展望の拡散”尺度との間に正の相

Table 1　人生に対する積極的態度尺度　因子分析結果

項　目　No.	F1	F2	F3	F4	F5
因子Ⅰ：目的や夢を持とうとする態度（目標・夢尺度）					
2　夢に向かって進もうとしている	.810	.076	.011	−.114	.071
3　人生において何かを達成しようとしている	.754	−.022	−.113	.182	−.020
24　打ち込めるようなものを持とうとしている	.692	−.065	−.018	.088	−.166
1　人生において何らかの目標を持とうとしている	.659	.221	.009	−.256	.028
38　理想の自分に近づこうとしている	.473	.264	−.010	.039	.022
因子Ⅱ：自己を向上させようとする態度（向上心尺度）					
39　日々自分自身を向上させようとしている	.050	.890	−.105	.114	−.032
40　自分が成長するように日々を過ごしている	.042	.767	.123	.021	−.056
41　日々自分を磨こうとしている	.017	.757	.116	.109	−.084
45　日々挑戦しようとしている	.099	.605	.001	.162	.040
因子Ⅲ：肯定的に捉えようとする態度（肯定的尺度）					
23　毎日毎日を楽しもうとしている	−.161	−.008	.828	−.119	.154
10　期待を持って生きようとしている	−.029	.070	.745	.007	−.077
11　明るい未来を信じようとしている	.058	.183	.624	−.051	−.221
25　人生を楽しもうとしている	.272	−.303	.593	.111	−.041
8　人生において良い面に目を向けようとしている	−.140	.124	.579	−.174	.162
13　人生に可能性を見出そうとしている	.234	−.104	.552	.109	.098
29　生きていることを感謝しながら生きている	−.093	.061	.538	.096	−.090
因子Ⅳ：時間を大切にしようとする態度（時間重視尺度）					
28　時間を大事に使おうとしている	−.043	.084	−.035	.828	−.025
27　無駄のない日々をすごそうとしている	−.126	.135	−.066	.776	.039
31　意味のある時間の使い方をしようとしている	.139	.041	.065	.688	−.104
30　常に有意義な時間を過ごそうとしている	−.158	.177	.202	.590	.137
4　日々なんとなく過ごしている（R）	.154	−.093	−.200	.516	.230
26　毎日を大切に過ごそうとしている	.167	−.009	.242	.409	.222
因子Ⅴ：自分らしさを重視しようとする態度（自分らしさ尺度）					
32　自分らしく生きようとしている	−.159	−.009	−.100	.159	.805
33　人に流されず生きようとしている	.187	.282	−.000	−.224	.608
34　自分独自の生き方をしようとしている	.023	−.202	.100	.092	.583
因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
F1	1.000	.521	.525	.550	.431
F2		1.000	.375	.485	.334
F3			1.000	.602	.552
F4				1.000	.523
F5					1.000

注1．（R）は逆転項目を示す

Table 2　人生に対する積極的態度尺度
基本統計と信頼性係数

	Mean	SD	α	再検査信頼性（r，N＝98）
目標・夢	21.50	3.32	.83	.89**
向上心	15.91	3.28	.95	.83**
肯定的	28.02	4.49	.82	.82**
時間重視	22.84	4.55	.86	.88**
自分らしさ	12.01	2.19	.76	.94**

注1．p＜.01は**

Table 3　人生に対する積極的態度の妥当性
充実感尺度との相関関係

	充実Ⅰ	充実Ⅱ	充実Ⅲ	充実Ⅳ
目標・夢	.51**	.41**	.04	.57**
向上心	.62**	.33**	.08	.61**
肯定的	.52**	.33**	.11	.62**
時間重視	.67**	.52**	.22**	.64**
自分らしさ	.37**	.50**	.10	.21**

注1．充実Ⅰは充実感気分―退屈虚無感，充実Ⅱは自立・自信―甘え・自信のなさ，充実Ⅲは連帯―孤立，充実Ⅳは信頼・時間的展望―不信・時間的展望の拡散を示す。p＜.01は**

関が見られた。また，“時間重視”尺度，及び，“自分らしさ”尺度は，“自律・自信－甘え・自信のなさ”尺度との間に比較的強い正の相関が見られた。

更に，“連帯－孤立”尺度との間は，“時間重視”尺度のみと弱い正の相関が見られた。これらの結果から，青年期における“人生に対する積極的態度”は，青年期における生活や人生に対する満足度や生き甲斐感，その中に生きる自己についての自信などと深く関

連していることが改めてわかり，本尺度が青年期における人生に対する肯定的心理を測定する尺度として構成概念的に妥当であると示唆された（Table 3）。

また，人生における積極的な態度と，自分に対する理解者や他者と繋がっている感覚との関連は直接的には強くないということが示唆された。これは，研究1において，述べたように，人生に対する積極的態度の構成要素として，“対人的信頼感”を中心とした他者との関係が得られなかったことについても支持する結果といえるだろう。

次に，本尺度について，弁別的妥当性の観点から検討を行った。本尺度と日本語版 SWLS（角野，1994）とが，相関を持ちながらも，弁別性を持っていることを検討するため，本尺度と SWLS の全項目について主因子法，プロマックス回転による因子分析を行った。

その結果，本尺度の第1因子“肯定的”（.80～.53），第2因子“時間の大切さ”（.83～.42），第3因子“目的・夢”（.82～.48），第4因子“SWLS”（.88～.57），第5因子“向上心”（.89～.60），第6因子“自分らしさ”（.78～.57）と，本尺度の5つの下位尺度項目と日本語版 SWLS（角野，1994）に完全に対応する6因子が抽出された。因子パターンは当該因子以外の因子負荷量の絶対値が.31以下という，比較的単純構造性を持っているものだった。日本語版 SWLS（角野，1994）は，本尺度の5因子と別の因子として抽出され，本尺度の弁別的妥当性が示唆された。

このような結果から，研究2において作成された“人生に対する積極的態度尺度”は信頼性，妥当性において一定の基準に達しているということがわかった。研究2によって最終的に決定した下位尺度名，質問項目内容は Table 1 に示すとおりである。

第4章　総合考察

本研究では，先行研究において焦点が当てられることが少なかった，青年期における肯定的な心理として，“人生に対する積極的態度”に着目し，その心理構造のモデル化を試みた。

研究1の結果、先行研究における知見から，人生に対する積極的態度は，青年期における精神的健康，主観的幸福感と関連の強い，新たな肯定的な心理構造の指標として位置づけられるということ，また，他世代における人生に対する心理，特に精神的健康や主観的幸福感の高い群の人生に対する心理との比較から，本研究で得られた人生に対する積極的態度の心理構造モデルが，青年期において特徴的なものであることが明らかとなった。

更に，本研究2で作成した“人生に対する積極的態度尺度”は，青年期における人生に対する積極的な態度を測定しうる尺度として，信頼性，妥当性に関して一定の基準を満たしていることが示唆された。このことから本尺度は今後，青年期における精神的健康，主観的幸福感を示す，新たな指標の一つとして，心理教育や心理援助における効果測定等に活用しうる有効な尺度となると考えられる。

今後は，青年期における他の心理との関連を含めた本尺度の，構成概念妥当性の更なる検討を行うこと，また，青年期における人生に対する積極的態度に対する影響要因にはどのようなものがあるかについて検討を行うことを課題としていきたい。

（指導教員　下山晴彦教授）

引用・参考文献

①論文

Diener. E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. 1985 The Satisfaction with Life Scale. Jounal of Personality Assessment, 49, pp. 71−75

日潟淳子・岡本裕子　2008　中年期の時間的展望と精神的健康との関係：40歳代，50歳代，60歳代の年代別による検討　発達心理学研究，19（2），pp. 144−156

日潟淳子・齊藤誠一　2007　青年期における時間的展望と出来事想起および精神的健康との関連　発達心理学研究，18（2），pp. 109−119

5）五十嵐敦・氏家達夫・青田華代　1999　中年期における心理社会的身体的変化に対する適応過程に関する縦断的研究：中年期の人生・生活に対する態度についての分析　生涯学習教育研究センター年報．4，福島大学，福島，pp. 27−37

角野善司　1994　人生に対する満足尺度　The Satisfaction with Life Scale [SWLS]　日本語版作成の試み　日本心理学会第58回大会発表論文集，pp. 192

勝俣瑛史　1995　時間的展望の概念と構造．熊本大学教育学部紀要，人文科学，44，熊本大学，熊本，pp. 307−318

北爪直美・小川俊樹・菅野純　2007　中学生の学校適応のタイプと時間的展望との関連　日本教育心理学会第49回総会発表論文集．535.

久木山健一　2005　青年期の社会的スキル改善意欲に関する検討　発達心理学研究，16，（1），pp. 59−71

宮下一博　1987　Rasmussen の自我同一性尺度の日本語版の検討　教育心理学研究，35，pp. 253−258

水野江美・西本実苗・井上健　2006　青年期におけるポジティブ・イリュージョンと心身症状，自己肯定感について　関西学院大学紀要：臨床教育心理学研究，32，1，関西学院大学，大阪，pp. 29−36

Newgarten, BL., Havighrst, RJ., & Tobin, S. 1961 The measurement of life satisfaction. Jounal of Gerontology. 16, pp. 134−143
西田裕紀子　2000　成人女性の多様なライフスタイルと主観的幸福感に関する研究　教育心理学研究，48，pp. 433−443
大野久　1984　現代青年の充実感に関する一研究―現代青年の心情モデルについての検討　教育心理学研究，32，pp. 100−109
３）下山晴彦　1993　スチューデント・アパシーの心理臨床援助から見えてくること：「危機 VS 平穏」から「危機としての平穏」の青年期論へ　日本教育心理学会第35回大会発表論文集，pp. 61
白井利明　1991　青年期から中年期における時間的展望と時間的信念の関連　心理学研究，65，pp. 54−60
谷冬彦　1998　青年期における基本的信頼感と時間的展望　発達心理学研究，９，（１），pp. 35−44
谷冬彦　2001　青年期における同一性の感覚の構造多次元同一性尺度（MEIS）の作成　教育心理学研究，49，pp. 265−273
２）寺崎正治・網島啓司・西村智代　1999　主観的幸福感の構造．川崎医療福祉学会誌，９，１，川崎医療福祉大学，神奈川，pp. 43−48
都筑学　2001　小中学生における時間的展望の横断的分析　日本教育心理学会第43回総会発表論文集，pp. 24
植田智・吉森護・有倉巳幸　1992　ハッピネスに関する心理学的研究（２）　広島大学教育学部紀要，41，広島大学，広島，pp. 35−40
山口智子　2000　高齢者の人生の語りにおける類型化の試み：回想についての基礎的研究として　心理臨床学研究，18，（２），pp. 151−161

②単行本
Erikson, E. H.　1982　自我同一性：アイデンティティとライフサイクル（小此木啓吾，訳編）．東京：誠信書房（Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle. New York : International Universities Press）
狩野裕・三浦麻子　1997　AMOS，EQS，CALIS によるグラフィカル多変量解析：目で見る共分散構造分析　pp. 141　東京：現代数学社
４）Lewin, K.　1954　社会科学における場の理論（猪俣佐登留，訳）東京：誠信書房．（Lewin, K. 1951 Field theory in social science : Selected theoretical papers. New York : Harper & Brothers）
西平直喜　1979　青年期における発達の特徴と教育，太田堯（編），子どもの発達と教育６，pp. １−56　東京：岩波書店．
岡本裕子　1994　成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究　東京：風間書房
島井哲志（編）　2006　ポジティブ心理学：21世紀の心理学の可能性　東京：ナカニシヤ出版
白井利明　1997　時間的展望の生涯発達心理学　東京：勁草書房
和田修一　1990　老人の幸福感．無藤隆・高橋恵子・田島信元（編），発達心理学入門Ⅱ　pp. 149−161　東京：東京大学出版会

③その他
１）Seligman, M. E. p. 1998 Building human strength : Psychology forgotten mission. APA Monitor, 29, 1. A Publication of the American Psychological Association